工女通じ豊かな産業交流

岡谷蚕糸博物館開館60周年記念式典

飛騨と岡谷 歴史振り返る

岡谷市の岡谷蚕糸博物館の開館60周年・リニューアルオープン10周年を記念した式典が23日、同市のカノラホールであった。かつて岐阜県飛騨地方から出稼ぎに訪れて製糸業を支えた工女と、博物館の歩みをテーマにした講演を展開。明治から昭和初期にかけて生糸の一大生産地として発展した岡谷を会場に、蚕糸業の歴史とシルクの魅力に触れた。

（小山眞由美）

岡谷蚕糸博物館は1964年10月に同市本町に開館し、2014年8月に同市郷田でリニューアルオープンした。

式典はかつて製糸業で隆盛を極めた同市が主催した。

記念講演では、岐阜県の都竹淳也飛騨市長(57)が「飛騨と岡谷―糸引き工女を通じた豊かな産業交流の歴史」と題して話した。映画「あゝ野麦峠」で女工哀史のイメージが植え付けられてしまったと強調。工女だった高齢女性の体験談を基に、仕事や食事、賃金を取り上げ、楽しく実りの多い生活を送っていたとの証言も紹介した。

「明治期の労働事情は厳しいものであったが時代であり、岡谷の工女は大切にされていた」と都竹市長。工女の収入は飛騨の地域経済も支えていたとし、「両地域に豊かな産業交流の歴史があったことを今一度、認識すべき。『女工哀史』の史観を脱し、女工讃史につなげたい」と語った。

式典には県内外の約160人が集まった。記念講演に先立ち、博物館の髙林千幸館長による講演「岡谷蚕糸博物館60年のあゆみ」も行われた。